

(我が青春のアンケート・ヴァレンチク) 前作加筆版



若い頃、ロシアに語学短期留学に行った折、我々短期留学の男子の間で、評判の女の子がいました。名前も分からず、どの国から来たのかも分かりませんが、小柄、金髪、黒い瞳のとてもかわいらしい娘(こ)です。

「あんな娘(こ)と話してみたいな。何語で話せばいいんだろう」などと言う話をしていましたが、その娘のそばにはいつも、古城の門番みたいなでっかい女の友達がついていて、虫払いをしているようになかなかきっかけが見つかりませんでした。

ところが、ある日、与えられた自室のベッドの上でごろりとなっていて、扉をノックする音がしたので、「いいよ、入れよ」と横になったまま、言いました。同じ短期留学のクラスメイトだと思ったのです。

ところが、入ってくる様子がないので、仕方なく起き上がって扉を開けると、立っていたんです、その娘さんが。ただし、その後ろにおばあさんも立っていました。

無論とっさに言葉が出ません。第一何語を使えばいいのかも分かりません。当時ロシアではあまり英語が話されていなかったのです。

で、その娘さんが話し出したのは、英語でした。

「わたしは、アンケ。アンケ・ヴァレンチクです。西ドイツから来ました。後ろに居るのは私のおばあさんです。私一人で来るのを心配してついてきました。」

と、そこまでは覚えているんですが、一体この、かわいらしいドイツ娘が、僕の部屋に何しに来たのか？

おそらくは訊いたんだと思いますし、答えも聞いたはずなんですけど、何故か今になって何も思い出せないのです。洗濯物が落ちていたんで届けに来ましたでもないし、日本語を教わりに来ましたがでもない。無論おつきあいしてくださいでは絶対なかったような気がします。ならばなんのよう出来たのか？思い出せないのです。

暫くして、アンケとおばあさんは扉を閉めて、多分どこかへ行ったんだと思います。でも、その後の記憶も定かではありません。

今、手元に、そのアンケと門番みたいな大柄な女友達と、当時の僕のクラスメートの男子が映っている写真が残っています。多分これは、通っていた外国人向けロシア語学校の入り口の階段そばだと思うのですが、クラスメートと門番女子はどこか、遠くを見ている目つきなのですが、アンケだけは僕が向けたカメラのレンズをじっと見つめている写真です。ですが、やはり、どうしてこういう写真を撮れるシチュエーションが成り立ったのか？それすらもよく思い出せません。

今見ると、アンケは、少しほほえんでは居るんですが、少し切ないような目をしているようにも見えます。

一体あのとき、あの短い時間で何があったのか？

で、暫く、というか、かなり真剣に当時のことを思い出してみると、なんでアンケが僕の部屋に来たのかを思い出すことが出来ました。

「明日、西ドイツに帰ります。楽しい時間をありがとうございました。ダンケシェーン」それを言いに来たのです。

アンケもその後、無事に生きていけば既に齢（よわい）60過ぎです。いったいどんな人生を歩まれて、どんな老婦人になっていらっしゃるのか？出来ればお会いしてお話が出来たら、とても嬉しいことなのだと思います。